



Title	1930年代なかばの西安と中国共産党：中国政治における「地方実力派」の位置づけに関する一考察
Author(s)	田中, 仁
Citation	現代中国研究. 1999, 5, p. 50-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1930年代なかばの西安と中国共産党

— 中国政治における「地方実力派」の位置づけに関する一考察 —

田 中 仁

はじめに

1936年12月に勃発した西安事変は中国政治の基本方向を「内戦停止・一致抗日」に転換させたという点で画期的意義を有しており、そしてそれが張学良・楊虎城という「地方実力派¹⁾」と抗日民族統一戦線政策に転換した中国共産党（以下、中共）との連携を背景として引き起こされたということは、すべての論者が強調するところである。

1930年代なかばの白区地区における中共の組織的再生は、一二九運動期の平津（北平・天津）地区を嚆矢とし、36年の救国会運動の発展を背景に全国的ネットワーク（白区連絡網）を構築するための端緒を獲得しつつあった。平津地区における組織的再生は、日本軍の華北分離工作に起因する「政治的空白」およびコミンテルンの新方針の伝播を背景とし、中共の直接指導下にあった諸組織を基盤として一二九抗日学生運動を展開することによって可能となった（拙稿、1994①、pp.54-55）。一方、上海は左翼文化運動の中心地であり、また革命家や左派知識人がアジールとしうる租界が存在していた。コミンテルンの新方針の上海への伝播は、左派知識人と組織関係を喪失していた少なからずの中共黨員を救国会運動に結集させた。この組織は公開的部分と非公開部分を左派知識人と中共黨員が分担する統一戦線組織であり、「内戦停止・一致抗日」を主張する諸政治勢力との連携を試みる過程で、36年夏には中国政治における新たな潮流を創出することに成功した（拙稿、1993、pp.207-217）。しかしながら、西安事変前後の西安には、平津地区で見られたような「政治的空白」も、また租界も存在しなかった。後述するように、この時期、陝西省政府主席邵力子とともに西安政治を担っていたのは、西北剿匪総司令部副総司令として東北軍を率

1) 「地方実力派」は、国民革命の過程で国民政府に合流した軍閥に対する「反革命」という評価を留保し、現実に存在する政治勢力として考察するという、中国の学界における1980年代以来の新傾向のなかで提出された研究用語である。中国革命史における軍閥の位置づけについては、拙稿（1994②）を参照。また抗日民族統一戦線史における「地方実力派」の位置づけが重要な研究課題であることについては、拙稿（1998）を参照。

いて同地にやって来た張学良と、十七路軍の統括者（総指揮）であり陝西綏靖公署主任の楊虎城であった。

本稿の課題は、1935年から38年にいたる西安における中共の組織と活動の実態を整理しつつ、その特徴を検討することにある。その際、筆者は、次の三点に留意したい。第一に、中共と張学良・楊虎城の関係、すなわち紅軍と東北軍・十七路軍による「三位一体」的關係がいつ形成されその実態はどのようなものであったのか、そして「三位一体」と「西北大連合」構想の関係をどのように理解すべきか、という問題である²⁾。第二に、一二九運動および救国会運動の高揚の過程で形成され始めた中共の白区連絡網は、西安事変を経て、第二次国共合作期には30前後の八路軍部辦事処の開設によって全国的ネットワークに発展したが、西安地下党は、時間的・空間的にこれを媒介することになった。このことから、我々は、西安地下党の再建過程における平津・上海地下党の役割、および西安地下党と党中央との組織関係の回復に注目する必要がある。第三に、30年代なかばにおける白区党組織の再生という観点からすれば、平津地区および上海における大衆的抗日運動の展開と西安におけるそれとの共通点と相違点を視野にいれなければならない。本稿を通して、30年代中国政治における「地方実力派」の役割、とりわけ大衆的抗日運動の高揚および抗日民族統一戦線の形成との関連にかかわる新たな論点を提出したい³⁾。

I. 「八一宣言」の伝播と「三位一体」の初歩的形成

1) 1930年代前半の西安政治と東北軍の移駐

馮玉祥（西北軍）系部隊の一師長であった楊虎城は、1929年、馮に背いて蒋介石に投じた。楊は、翌年の中原大戦の過程で勢力を拡大して十七路軍を組織し、戦後に陝西省政府主席となった。軍事勢力としての馮玉祥集団の消滅により、陝西省における蒋介石と楊虎城の矛盾が顕在化した。33年末、蒋は省主席の地位を楊から奪い、後任に彼の側近たる邵力子を充てた（楊奎松、1995、p.125）。国民革命期に中共に入党し27年から西安事変期ま

2) 紅軍・東北軍による西北国防政府の樹立を基本的内容とする「西北大連合」構想は、1936年5月に中共が提起し張学良もそれを受け入れた。この構想は「反蒋抗日」を基本認識としており、西北国防政府が樹立されれば南京国民政府との対立局面が顕在化するとともに中国政局が一気に流動化することは不可避であった。8月、張による決起の決断と相前後して届いたコミンテルン指示によって、この構想は放棄された。一方、「我々と張は三位一体であり、進む時は共に進み退く時は共に退く。我々は張・楊のどちらも失うことはできない」（「毛沢東等致周恩来電」1937年1月30日、中共中央文献研究室編、1988、p.171）が示すように、西安事変期における紅軍・東北軍・西北軍の関係を「三位一体」と捉えることは当事者自身が有していた認識であった。

3) かつて矢沢康祐は、「中国人民対日作戦的基本綱領」（1934年4月20日）と「八一宣言」の類似性を指摘しつつ、民族武装自衛運動から一二九運動を経て救国会運動にいたる抗日大衆運動が中共の路線転換をリードしたという論点を提示した（矢沢康祐、1963）。現在、この綱領が33年10月27日の王明・康生の中共政治局宛書簡に由来することが明らかになっており（周国全・郭德宏、1991、p.64）、また抗日大衆運動と中共地下組織との関係も徐々に明らかになりつつある。従って、矢沢が提起したこのような見方については、研究の現状を踏まえた再検討が求められている。

で楊虎城の機密秘書であった米暫沅は（王炳南，1986，pp.1-2），楊虎城と中共との関係について以下のように概括している（米暫沅，1986，pp.60-62）。

楊虎城は、中国政治において蒋介石と対抗しうる唯一の政治勢力として中共を捉え、組織関係を喪失していた、あるいは彼自身が獄中から救出した中共黨員たちを重用した。1930年10月、西安に進駐して省政府主席となった楊虎城は南漢宸⁴⁾を省政府秘書長に任じたが、南が最初に行ったことはすべての政治犯の釈放であり、そのなかには少なからずの共産黨員が含まれていた。楊はまた、張漢民を營長（大隊長）とする省政府警備營を編成する一方、十七路軍總指揮部に憲兵營を設置して副營長に中共黨員紀子中を任じた。紀が病没したあと、金閔生と童陸生（ともに中共黨員）を正副營長とした。同營のいくつかの連長（中隊長）・排長（小隊長）も中共黨員であり、これが後の中共西北特別支部の拠点となった⁵⁾。このほか、楊のもとで要職についていた中共黨員として綏靖公署參謀處處長王根僧、『西北文化日報』編集長宋綺雲⁶⁾がいる。

1933年、中共陝西省委常務委員兼組織部長杜衡の逮捕・裏切りにより省委と西安市委は壊滅的打撃を被った（中共東北軍党史組編，1995①，p.132）。さらに35年の大弾圧により組織関係を有する黨員数は3-400人を残すのみとなった（周維仁，1993，p.47）。

1935年10月2日、蒋介石は、蒋介石・張学良を正副總司令する西北剿匪總司令部の西安設置を発表するとともに（張が總司令の職務を代行）、五一軍軍長于学忠を甘肅省主席に任命した。これにともない河北・湖北兩省の東北軍は西北地区に移動を開始した。蒋はまた、楊虎城に対して十七路軍が同司令部の統括下に入るよう命じた（武育文・王維遠・楊玉芝，1987，p.370）。今井駿は、この時期移駐した東北軍を15-16万人として家族を含め約30万人が西北地区に流入したと推計しているが（今井駿，1997③，p.248），このことは西安における政治・社会状況に深刻な影響を与えた。十七路軍約5万（石島紀之，1984，pp.43-44）を擁する土着勢力として西安政治を担っていた楊虎城は、軍事的に張学良の麾下に入ること余儀なくされた。また後進的な經濟基盤が許容しうる限度を超えた東北軍集團の流入は、十七路軍との間にさまざまな紛糾を引き起こすことになった（米暫沅 1986，pp.81-84。また今井駿（1997③）pp.247-248も参照）。なお当時の東北軍内に中共組織は存在せず、少数の黨員が独自に活動しているだけであった（中共東北軍党史組編，1995②，p.2）。

4) 南漢宸（1895-1979）は、26年中共に入党。32年夏、省政府秘書長を辞任した（葉英・馮凱，1985，pp.272, 278-279）。

5) 徐彬如（1901-1990，25年中共に入党）は、32年上海中央軍事委員會の連絡ポイントとなっていた王根僧宅で謝華（原名謝茲山）と出会い組織関係を回復した。後に、謝が十七路軍憲兵營の文化教官に就任し金閔生らを入党させた。同時期、王根僧・徐彬如も西安に入ったが徐は当地に足場を築けず上海に戻った（徐彬如，1991，pp.96-99）。

6) 宋綺雲（1904-1949，27年中共に入党）。29年、党の指示により楊虎城部隊に投じた。31-37年、彼は十七路軍機關紙『西北文化日報』副社長兼編集長としてこの新聞社の全業務を統括した。41年、国民党の特務に逮捕され、49年、楊虎城とともに処刑された（江山・胡民新・黃朝章，1983，pp.258-281）。

2)「八一宣言」の伝播と西安の新情勢

1935年9-11月の紅軍との戦闘において東北軍の3箇師が壊滅したこと⁷⁾、およびこれに対する南京の冷淡な対応は、張学良に彼自身および東北軍の前途についての再検討を促した。11月、彼は、杜重遠・李杜・馬占山らとの会見を契機として中共との接点を求めるとともに、それを通じての新たな政治展望を模索し始めた⁸⁾。とはいえ我々は、「八一宣言」が「抗日救国」を主張するすべての勢力の結集を提起しつつ、張学良を蒋介石とともに「売国賊」と規定していたこと（「中国蘇維埃政府、中国共産党中央為抗日救国告全体同胞書」、中央檔案館編、1991①、p.519）に、留意しておく必要がある。

張学良は、(1)李杜に上海で中共との接点を探るよう依頼するとともに、(2)彼が校長をしていた北平の東北大学の学生代表を西安に招き——東北大学の学生が一二九運動の牽引車であったことから、そのなかに中共黨員を見いださうと張は考えた——、さらに(3)王以哲に対して、剿共の前線において中共黨員を探すよう指示した（中共東北軍党史組編、1995②、pp.11-12）。

1月初め、東北軍六一九团团長高福源⁹⁾が東北軍のもとに帰来し、王以哲（東北軍第六七軍軍長）と張学良に対して、ソ区における数箇月間の見聞とともに中共の抗日救国の主張と東北軍との提携の希望を伝達した。これに対して張と王は、高を再び瓦礫堡に赴かせ、中共に正式の代表を送るよう依頼した。16日、高は瓦礫堡で張・王の見解を李克農に伝えた。これに対して中共中央は、李を代表として派遣することを決定した（李勇・張仲田編、1988、pp.87-88）。25日、中共中央は、張学良・于学忠らと「東北軍各師団長と全将士」に対して、ソヴェト政府・紅軍と国防政府・抗日連軍を樹立するため相互に代表を派遣して協議しようと呼びかけた（「紅軍為願意同東北軍聯合抗日致東北軍全体将士書」、中央檔案館編、1991②、pp.4-8）。2月26-28日、李克農は洛川で王以哲と交渉し、(1)紅軍・第六七軍間の共同抗日と相互不侵犯、(2)通商に関する便宜供与について合意に達した。3月4日、李は張学良と同地で会談し、西安に中共の常駐代表を設置することを確認した（李勇・張仲田編、1988、pp.91-93）。

7) 9月、張学良は、鄂豫皖の東北軍と河南に駐屯していた五一軍に対し西北に移駐して中共の陝甘寧根拠地に対する围剿を命じた。10月1日、東北軍一〇師の2箇歩兵団と師直属隊が勞山で、また26日には東北軍一〇七師の4箇營と六一九団部が榆林橋鎮で、紅軍に殲滅された。さらに11月21日、東北軍一〇九師と一〇六師の一部が直羅鎮での紅軍との戦闘で壊滅した（武育文・王維遠・楊玉芝、1987、p.594）。

8) 彼らは、ファシズムを賞賛し蒋介石に従って围剿を推進することは東北軍を死地に追いやるだけであるとし、紅軍および楊虎城や新疆の「地方実力派」で東北出身の盛世才と連係して西北地区に抗日大連合を樹立すべきであると提起した（中共東北軍党史組編、1995②、p.11）。

9) 高福源（1901-1937）は、35年9月、東北軍一〇七師六一九団の營長となった。10月、榆林橋の戦闘で紅軍の捕虜となり瓦礫堡に護送。白軍軍官訓練班に参加し、中共に入党。36年1月、洛川に帰還し王以哲・張学良と会見した。以後、東北軍・紅軍間の連絡工作に従事し、12月には少将に昇進して一〇五独立師第一旅旅長となった。37年2月、二二事件直後に誤殺された（中共東北軍党史組編、1995③、pp.50-54）。

1月末、東北大学の学生は、宋黎・韓永贊・馬紹周の三人を東北大学生代表兼北平学連代表として西安に派遣することを決定した。会見した張学良は、彼らを西安に留めて抗日工作に従事させることとした。東北大学と北平学連は、このルートを通じて西安に抗日宣伝要員を送りこむこととなった¹⁰⁾。このほか、35年末から36年春にかけて、北平・天津・上海・武漢などから、劉瀾波・苗淳¹¹⁾・高崇民¹²⁾・栗又文¹³⁾らの知識人が西安入りし、それぞれの社会関係を利用して東北軍内部で抗日救亡活動を展開した（中共東北軍党史組編，1995②，p.21）。3月，李杜は、かつて中共中央軍事委員会で情報工作に従事し組織関係を失っていた劉鼎を探し出し、張学良に報告した。3-4月，彼は西安で張と会見した¹⁴⁾。

一方，中共と楊虎城との関係では，(1)天津の中共北方局，(2)陝北の党中央，および(3)上海地下組織（軍事委員会系統）からのアプローチが見られた。

1935年11月，当時天津の中共北方局で工作していた南漢宸は，「八一宣言」の内容を，十七路軍駐北平辦事處處長申伯純を介して楊に伝達するとともに，紅軍・十七路軍間の相互不可侵協定の締結を提案した¹⁵⁾。これに対して楊は，積極的に考慮すべきものとして具体案の提示を南に求めた。12月，申は天津に戻り南にこれを伝達した（申伯純，1987，p.287）。南漢宸は王世英を西安に派遣し，楊に対して六項目の合作抗日案（北方局案）を提示した（米暫沅，1986，p.92）。一方毛沢東は，12月5日に楊虎城と杜斌丞¹⁶⁾に対して十七路軍との提携を求める書簡を書き，それを同軍での工作経験を有する汪鋒に託した（中共中央文献研究室編，1993，pp.494-495）。1箇月余りの西安滞在中，汪と王は楊と交渉し北方局案を基礎として論点の整理を試みた。その結果，両者は，(1)相互不干渉；(2)代表の相互派遣・電

10) 中共東北軍党史組編，1995②，p.12。この三人のうち宋黎のみが中共黨員であった（宋黎，1995，p.24）。

11) 車向忱（1898-1971）は，王以哲の招きで西安に入り流亡子弟のために東北競存小学を創設。46年中共に入党，79年党籍公開（中共東北軍党史組編，1995③，pp.214-219）。

12) 高崇民（1891-1971）は，1935年夏，上海で胡愈之・鄒韜奮・孫達生と交流をもった。中共地下党の要請を受け，連共抗日と張学良・楊虎城の連係強化を目的として11月に西安に入った。46年中共に入党（中共東北軍党史組編，1995③，pp.207-213）。

13) 栗又文（1901-1984）は，32年から北平市立商業高中校長，35年11月，南漢宸の要請を受け西安に赴き，張学良の上校待遇の機密秘書となる。36年4月，中共に入党（中共東北軍党史組編，1995③，pp.131-136）。

14) 中共東北軍党史組編，1995③，pp.18-21；楊奎松，1995，pp.62，75-76。西安に赴く前，劉鼎には上海で10日前後の準備期間があった。夏衍は劉の西安・陝北行きを知り，党中央への報告を劉に託した。こうして劉は党内文献を見ることが可能になった。彼は，「八一宣言」を含む統一戦線関連文献を検討するとともに，一般の新聞・雑誌により国内の諸情勢を研究した（張魁堂，1990，p.222）。

15) 米暫沅，1986，p.90。当時申伯純は中共黨員ではなかった（1937年入党，中共中央統戰部・金陵之声廣播電台編輯部編，1986，pp.325-326）。

16) 杜斌丞（1888-1947）は，西北地区の愛国民衆運動において威信と影響力を有した教育者・社会活動家で，1930年，楊虎城のもとで陝西省政府高級參議となった。西安事変の後，省政府秘書長に就任（38年秋まで）。47年，蒋介石の命令で逮捕・処刑された（宋新勇・劉杰誠・李敬謙，1994，pp.287-324）。

信台の設置；(3)連絡ステーションの設立；(4)抗日の準備について合意した。同時に彼らはたびたび杜斌丞との交流の機会をもち、中共の抗日政策に対する杜の支持を獲得した。2月下旬、汪鋒と王世英は陝北に帰還し、党中央に対して交渉の結果を報告し批准された（米暫沅，1986，pp.92-94；葉英・段建国，1985，pp.305-306）。しかしながら楊虎城は中共中央と直接的関係をもつことを回避した。4月中旬，中央は王世英を西安に派遣したが，楊は彼と会おうとしなかった（楊奎松，1995，p.123）。

1935年，謝華は上海民族武装自衛委員会内の党組織で，徐彬如は「軍事委員会留滬辦事處」（上海臨時中央局軍事委員会）で工作に従事していた。同年秋，十七路軍憲兵營營長で党支部責任者でもあった金閩生から，兩人の西安帰来を求める手紙が届いた。徐向午（武衛会党団書記）は，(1)同軍内の黨員との関係の回復；(2)楊虎城の獲得；(3)西北抗日運動の展開；(4)長征途上の紅軍との連係を任務として，二人を西安に派遣した。南京で弁護士業に従事していた李木庵も同地に赴いた（徐彬如，1991，pp.99-101）。36年2月¹⁷⁾，中共西北特別支部（西北特支）が成立した（書記：謝華，成員：徐彬如・李木庵・金閩生・宋綺雲・童陸生・王根僧）。謝華・徐彬如・李木庵は西安綏靖公署のポストを与えられた。西北特支では，謝が組織を，徐と李が宣伝を管轄した。組織の活動資金は『西北文化日報』宣伝費の名目で楊虎城から支給された（王健英編，1995，p.409；徐彬如，1991，p.101）。

3) 延安会談と「三位一体」の初歩的形成

3月20-27日，劉長勝が持ち帰ったコミンテルン第七回大会関連文献を検討する中共中央政治局会議が開催された。会議は，「連ソ連共」を基準に，国民党を「民族反革命派」と「民族革命派」に区分し，張学良を「民族革命派」の右翼と位置づけた（中共中央文献研究室編，1989，pp.303, 304；中共中央文献研究室編，1993，pp.527-528。また楊奎松（1995）pp.58-59も参照）。このことは，中共の統一戦線工作において，張学良・東北軍が蒋介石（南京）と異なる範疇として扱われていくことを意味していた。張学良は紅軍の東征にともなう西北軍事情勢の流動化を踏まえて中共の責任者との直接交渉を求めているが，政治局会議の後，中共は周恩来を延安に派遣した。4月9日，張学良と周恩来の延安会談が実現した（兩人のほか王以哲・劉鼎・李克農が列席）。11日に周が張聞天・毛沢東・彭德懷に宛てた電報によると，会談の概要は下記のようなものであった（「周恩来關於與張学良商談各項問題致張聞天毛沢東彭德懷電」1936年4月10日，中共中央党史研究室，1990，pp.3-4；楊奎松，1995，pp.65-66, 76-77）。

- (1)「内戦停止・一致抗日」に張は完全に同意した。同時に彼は，この立場を公表する以前は蒋介石のソ区攻撃命令に従わざるを得ないとした。
- (2)張は，紅軍主力の河北への展開を全面的に支持するとともに，第四方面軍および二・六軍

¹⁷⁾ 徐彬如は，「謝華は西安到着後ただちに特別支部の成立を宣言した」と述べている（徐彬如，1991，p.101）。一方，謝は，7月30日の軍事委員会宛の報告において，「上海中央」による西安派遣を「2月初め」としている（楊奎松，1995，p.124）。

団の北上に理解を示した。

- (3)張は、抗日を実現するには国防政府・抗日連軍によるしかないとした。
- (4)張は、蒋介石に対する態度に関して東北軍中に変化が起こりつつあり、現在、彼自身が岐路に立たされているとし、現時点では「反蔣」を行えないとした。
- (5)双方は、ソ連に代表を派遣するとともに新疆の盛世才との関係を図ることで一致した。
- (6)東北軍・紅軍の具体的配置と行動の調整を行った。
- (7)張は、中共・紅軍の物資調達の便宜をはかることに同意した。
- (8)相互に連絡スタッフを置くとともに、彼のもとに中共の代表を派遣することになった。

この会談では、蒋介石評価に深入りすることを避けつつ¹⁸⁾、「内戦停止・一致抗日」が中国政治において最も優先すべき課題であることを確認した。この会談によって、紅軍・東北軍間の事実上の停戦が実現するとともに、中共中央と張学良・王以哲との間の恒常的な意思疎通が可能となった。4月、中共駐コミンテルン代表団は、楊虎城に対する統一戦線工作を行うため王炳南をドイツから帰国させた。王の父親と楊は旧友であり、加えて王はコミンテルンが派遣した重要人物であったことから、楊は王炳南を重視した（趙世臣，1990，p.154）。これによって、中共と楊虎城＝十七路軍との関係はもうひとつの接点を有することになった。我々は、ここに至って紅軍と東北軍・十七路軍による「三位一体」が初歩的形成を見たとしてよいであろう。4-5月、三軍間の敵対的状況は事実上停止した（中共東北軍党史組編，1995①，p.132）。

Ⅱ. 「西北大連合」構想と「三位一体」の成立

1) 「西北大連合」構想と両広事変

4月13-14日、中共中央は、(1)中共と東北軍・十七路軍との関係は周恩来が統括すること；(2)劉鼎を張学良のもとに派遣すること；(3)王以哲と李克農との密接な関係を保持すること；(4)鄧発を中央代表として新疆経由でソ連に派遣すること、を決定した（中共中央文献研究室編，1989，p.306；楊奎松，1995，p.80）。同月末、張学良が紅軍とともに「反蔣抗日」に決起する決意であるとの情報が中共にもたらされた。紅軍主力は東征を断念して陝北に帰還した直後であったが、毛沢東は、東北軍と連携して外モンゴル・ソ連との間を打通し、西北国防政府を樹立するための行動方針を提起した。5月8-9日、中共中央は毛の提起を踏まえて「西征戦役計画」を作成した（楊奎松，1995，pp.83-90；中共中央文献研究室編，1989，p.308）。

紅軍主力の陝北帰還にともなう軍事情勢の流動化は、張学良に周恩来との直接交渉を促した。5月12日、二度目の延安会談が実現した。会談は、「蘭州を大本営として中国政治に新局面を打ち立て、友国（ソ連）と打通する」ことを主たる内容とする「西北大連合」構想を確認し、さらに(1)9-10月に両軍による西北抗日連軍と西北国防政府を樹立するこ

18) 楊奎松は、延安会談前後の中共の主張を検討し、会談で張学良が提起した「擁蔣」「連蔣」の主張を周恩来が受け入れた、あるいはこれを肯定的に受け止めたとする、張学良および劉鼎の回想録に由来する従来の多くの見解は、成立しないことを実証した（楊奎松，1995，pp.60-69）。

と；(2)張学良が鄧発の新疆・ソ連行きを安排すること、を取り決めた（楊奎松，1995，p.96, 98）。28日，中共中央政治局は，「全国大革命」の準備段階と現状を把握した上で，それに向けて東北軍・十七路軍と紅軍の「三位一体」による西北国防政府を樹立し，紅軍内部の統一戦線教育を強化する必要があるという認識で一致した（中共中央文献研究室編，1989，p.311）。

6月初めに勃発した両広事変は，中共と張学良の関係および西安の政治情勢に大きな影響を与えた¹⁹⁾。同時に各「地方実力派」の活動が活発化し，そのひとつの帰結としていくつかの「地方実力派」が中共との関係を結んだことは²⁰⁾，中共に新たな政治的選択肢を付与した。さらに中共中央＝コミンテルン間の電信連絡の回復（16日）は，後者が中共の政策展開に直接関与するようになったことを意味していた。中国政治における中共の位置が，紅軍という軍事力を有する革命政党であると同時に，ソ連との「特殊な」関係によって規定されていたことからすれば，張学良や楊虎城を含む「地方実力派」との関係において電信連絡の回復が意味するところは重要であった。

両広事変の勃発にともない，中共中央は決起（西北国防政府の樹立）のスケジュールを前倒しして「遅くとも8月までに発動する」とし，その前提として東北軍工作を位置づけ—中共と東北軍の関係は依然として張学良・王以哲兩人とのパーソナルな関係に依存していた—，6月20日に中共中央東北軍工作委員会を樹立した（主任：周恩来，副主任：張浩，葉劍英，李克農，李濤，辺章五，秘書長：朱理治）²¹⁾。同日，党中央は，東北軍の現状を抗日的・革命的軍隊に転換する極めて大きな可能性を有しているとしたうえで，「我々の基本方針」は同軍を瓦解・分裂させることでも紅軍に変えることでもなく，東北軍に抗日の道を歩ませることである，とする東北軍工作に関する指導原則を定め（「中央關於東北軍工作的指導原則」，中央檔案館編，1991②，pp.30-32），西北決起めざして時間と競争しつつ同軍に対する工作を展開していった。

6月下旬に張学良と楊虎城によって開設された王曲軍官訓練団は，両広事変にともなう中国政治の流動化に直面して，「反蒋抗日」に決起するために必要な士官層の再教育を目的としていた。劉瀾波・孫銘九・応徳田・万毅・解如川（解方）・賈国輔（賈陶）・郭維城・吳家興ら，中共黨員や少壮派を含む多彩な人々が同団の教育にあたった（武育文・王維遠・楊玉芝，1987，p.397）。この時期，張学良は，中共に対して入党の意思を伝達するととも

19) 両広事変前後における張学良・楊虎城と両広および宋哲元・閻錫山・韓復榘との来往，両広支援に向けての張・楊の協議については，王菊人（1986）pp.197-200を参照。

20) この時期，広西の李宗仁・白崇禧，東北軍系の馬占山，旧十九路軍の陳銘樞・蔡廷鍔・蔣光鼐，華北の宋哲元・韓復榘が中共との接触を求めて来た。これに対して中共中央は，それぞれに代表を派遣した（楊奎松，1995，p.119）。

21) 楊奎松，1995，pp.111-112, 114頁；王健英編，1995，p.326頁。なお，中共東北軍党史組編，1995①，p.74；中共東北軍党史組編，1995②，p.16；鄭恵・張静如・梁志祥主編，1997，p.664は，同委員会成立を1936年初めとしている。

に、東北軍の組織強化を目的とするスタッフの派遣を要請した。7月2日、中共中央は、張の入党申請を積極的に検討したいとし、彼のもとに葉劍英と朱理治を派遣する予定であるとコミンテルンに打電した（楊奎松，1995，pp.109-111）。

両広事変は広東の脱落により終息に向かったが、8月6日、紅軍は西北地区で発展を期すべきであり、陝西・甘肅・寧夏・青海・新疆を一体化してソ連・外モンゴルと打通すべきであるというコミンテルンの指示が潘漢年によってもたらされたことは、中共に「西北大連合」構想を「国際路線」樹立と関連づけて具体化させることになった。またこの指示は、東北軍の暗黙の共同行動のもとで、紅軍の三方面軍の合流とソ連との打通を実現すべきであるという張学良の構想とも合致していた。10日、中央政治局は、(1)「ソ連との打通」を紅軍の行動方針の中心とすること、(2)潘漢年・葉劍英・朱理治を張のもとに派遣すること、を決定した。同月末、潘の説得により張学良は決起を決断した（楊奎松，1995，pp.142-155）。

2) 西北各界救国連合会と中共東北軍工作委員会の成立

中共西北特別支部は、張学良・楊虎城の黙認と暗黙の支持のもと、大衆的抗日救亡運動の組織化と推進を試みた。3月、謝華と徐彬如は、韓兆鶚（韓卓如）を通して、杜斌丞が組織した救国会の基礎の上に学生救国連合会と教職員救国連合会を樹立した。また『西北文化日報』の印刷工を中心に印刷工救国会が結成された（中共東北軍党史組編，1995①，pp.132-133）。この後、特支は童陸生が上海から持ち帰った「救国会」関連文献をもとに杜斌丞と協議し、6月1日、西北各界救国連合会（西救）が楊虎城の同意を得て樹立された。西救には総務部・組織部・宣伝部・青年部・交際部・婦女部が置かれ（後に民衆武装部を増設）、謝華（9月以降は楊明軒²²⁾）を総責任者とする幹部会を中心に以下のような集団指導体制がとられた（徐彬如，1991，p.222；中共東北軍党史組編，1995①，p.134）。

総務部：韓兆鶚，童陸生
組織部：謝華，樊仲黎（スタッフ：丁志明ら）
宣伝部：徐彬如，張兆麟（スタッフ：王玉勲ら）
青年部：樊仲黎（兼任）
交際部：宋綺雲（のち楊明軒）
婦女部：韓鍾秀，田潤芸（スタッフ：王洁，張毅，曹冠群，高舎梓ら）
民衆武装部：宋黎，李象九
秘書長：李木庵

西救は機関誌『救亡週刊』を地下出版物として発行するとともに、「全救会成立宣言」を散布するなどの方法で抗日宣伝を展開した。楊虎城は西救に関する全事項を杜斌丞に委ね、組織内では韓兆鶚が杜の意向を代表した。西救の活動経費は楊によって提供された（徐

²²⁾ 楊明軒（1891-1967）は、1926年に中共に入党した（李敬謙，1984，p.74）。

彬如, 1991, p.222; 中共東北軍党史組編, 1995①, pp.133-134)。7月30日, 謝華は, 十七路軍関係の情報収集に当たっていた梁中徳を介して党中央に西北特支の工作を報告した。こうして特支は党中央との組織関係を回復した(楊奎松, 1995, p.123, 124; 徐彬如, 1991, p.101)。

一方, 西安の東北軍社会にやって来た中共黨員が行なった抗日宣伝と組織化の試みはいかなるものであったのであろうか。

劉瀾波は, 苗淳
織の樹立を模索していた。4・5月, 劉は天津にもどり, 西安の状況を北方局に報告した。北方局は, 劉瀾波(書記)・苗淳(組織部長)・宋黎(宣伝部長)の三人によって構成される中共東北軍工作委員会(東工委)の樹立を指示した。6月初め, 劉が西安入りして北方局の決定を伝達し東工委が成立した。こうして東北軍内地下党の統一的指導が実現した(中共東北軍党史組編, 1995②, p.22)。

しかしながらこの時期, 彼らの活動は国民党の弾圧により曲折を経たものとならざるを得なかった。すなわち3月の活路事件と8月の艶晩事件である。3月, 高崇民・栗又文と孫達生は抗日を主張する数篇の文章を書いた。彼らはこれを『活路』と名づけたパンフレットとし, 東北軍・十七路軍に散布した。これに気づいた国民党特務が容疑者を逮捕したため, 高は天津に逃れた。8月, 宋黎・馬紹周らがあい次いで特務に逮捕された。張学良は宋を引き取るとともに, 劉瀾波と孫達生を保護するため「逮捕」した。さらに張は, 栗又文を新疆に派遣することによって, 特務の迫及を躲した(中共東北軍党史組編, 1995②, p.23)。

8月30日, 中共中央は, 朱理治を中央特派員として西安に派遣し東工委の指導に当らせた。ここに至って党中央の東工委に対する直接指導が実現した。劉瀾波・苗淳然・宋黎の分担に変化はなかったが, 項乃光が組織部副部長に, 高錦明が宣伝部副部長になった(中共東北軍党史組編, 1995②, pp.23-24)。

3) コミンテルン八月指示と「三位一体」の成立

「反蔣抗日」をめざす紅軍と東北軍による「西北大連合」の決起をおし止めたのは, 8月15日のコミンテルンの指示であった。指示は, (1)蒋介石を日本帝国主義と同一視するのは誤りであるとして, 軍事行動の即時停止と共同抗日を議題とする蒋介石・国民党との正式交渉を要求するとともに, (2)「統一された中華全国民主共和国」の実現および普通選挙に基づく「中華全国議会」招集と「中華全国国防政府」樹立を中共自身が提唱すべきであるとし, さらに(3)張学良の入党申請に対する中共の肯定的対応に強い懸念を表明し, 彼を我々の「信頼するに足る盟友である」と見なすことはできない」と断じていた(「共産国際執委会書記処致中国共産党書記処電」1936年8月15日, 馬貴凡訳, 1988①, pp.86-87)。8月25日の国民党宛書簡, 9月1日の「逼蔣抗日」に関する党内指示, 17日の「民主共和国に関する決議」は, いずれもこのコミンテルン指示に沿って中共中央が方針転換を行った

ことを示すものであった。同時にそれは、「反蔣抗日」に依拠する「西北大連合」構想が停止を余儀なくされ、また張学良の中共入党の可能性も消滅したことを意味していた。

前述したように、楊虎城は西北特支のメンバーなど十七路軍の内部に少なからずの中共黨員を擁していただけでなく、彼らが推進する抗日宣伝を物心両面で支えていた。その一方で彼は、中共中央と直接的な関係を樹立することを回避してきた。自らの軍事基盤（十七路軍）が中共に掘り崩されるのではないかという猜疑心をもつ一方で、蒋介石の十七路軍に対する硬軟両面での圧迫に対する怒り、および張学良・中共関係の進展を知ったことにより、彼は中共中央と恒常的関係を打ち立てることを決断した（楊奎松，1995，pp.123-132）。9月6日、中共が派遣した張文彬が楊虎城と会見した。翌日、張と楊の機密秘書王菊人らとの交渉がもたれ、(1)十七路軍の配備の調整；(2)楊による民団と保甲組織のコントロール；(3)膚施（延安）と甘泉付近に十七路軍・紅軍の接触ポイントを設置すること；(4)電信台の設立、の四点で合意した。張文彬は金閩生の按配で李興中参謀長の家に寄宿することになった。こうして中共の西北軍工作を所轄する中共西北軍工作委員会が設置された（中共中央特派員：張文彬，書記：歐陽欽）（「張文彬給毛沢東的信」，1936年9月8日，中共中央党史研究室，1990，pp.12-13；王健英編，1995，p.409）。また十七路軍内に設置された秘密の紅軍連絡ステーションは、党中央と全国各地とをつなぐ接点としてヒトやモノの輸送に用いられた（凌輝，1987年，pp.194-195）。我々は、ここに至って中共と張学良（東北軍）・楊虎城（十七路軍）との「三位一体」が成立したと見なしてよいであろう。

10月下旬、西蘭公路の北方で合流した紅軍の三方面軍は、寧夏奪取による「国際路線」樹立（ソ連・外モンゴルとの打通）を試みたものの失敗し、第四方面軍の3箇軍を黄河西岸に孤立させる結果となり、11月8日、北路軍・南路軍・西路軍に再編せざるを得なかった（拙稿，1992，pp.65-67）。これにともない、守勢に立たされた紅軍に対する南京側の軍事攻勢も積極化した。

西北をめぐる軍事情勢は予断を許さないものであったが、その一方で、「三位一体」の成立にともない、西安の抗日情勢は新たな高揚を迎えることになった。9月、抗日同志会が東北軍内に秘密裏に組織された（主席：張学良）。同会は東北軍を指導する核心組織として構想され、応徳田（書記）・孫銘九（行動部長）・苗劍秋（宣伝部長）ら少壮派が組織の中心に位置していた。同時に、劉瀾波・劉鼎・苗涇に名を連ねていた（武育文・王維遠・楊玉芝，1987，pp.400-401）。同月、張学良は東北軍学兵隊を組織した。成員の大多数は天津などの党組織が派遣した学生であった。同隊は「連」を単位に組織されており、秘密裏に党支部が設置された（中共東北軍党史組編，1995①，pp.76-77）。東工委は西安東北軍社会における統一戦線組織が必要であると考え、劉瀾波・宋黎・車向忱によって東北民衆救亡会（東救）の樹立が提起された。10月4日に東救成立大会が開かれ、車向忱・洪飭・孫銘九・金錫如・苗劍秋・韓啓英・宋黎・劉瀾波ら30余人が執行委員となった（中共東北軍党史組編，1995①，pp.77-81）。西救は、東救と緊密に連

携しつつ、大衆的救亡組織の樹立—西安学生救国連合会（10月）、西安「民先」（抗日民族解放先鋒隊、9・10月）、西安新聞界救国連合会（12月）など—、政治キャンペーンの展開—辛亥革命25周年紀念大会（10月10日）、魯迅追悼大会（11月1日）、綏遠抗戰支援運動（10月）、一二九運動1周年デモ（12月9日）など—により、西安における抗日情勢の高揚を醸成していった（中共東北軍党史組編、1995①、pp.81-96）。

Ⅲ．西安事変と中国政治の転換

1）西安政治の再編成

12月12日の早朝、東北軍・十七路軍の各部隊は張学良・楊虎城の指揮のもと軍事行動を開始し（楊奎松、1995、p.296）、蒋介石および陳誠・朱紹良・蔣鼎文らを拘束した。張は決起直前に中共中央にこのことを打電していたが（楊奎松、1995、pp.289-296）、同日、張・楊は、(1)南京政府の改組、(2)内戦の停止、(3)七君子の即時釈放、(4)全政治犯の釈放、(5)大衆的愛国運動の是認、(6)集会・結社の自由の保障、(7)孫文遺囑の遵守、(8)救国会議の即時開催を内容とする八項目の政治主張を全国に通電した（「張学良、楊虎城双十二通電」1936年12月12日、西安事変研究会資料室編、1986年、pp.26-27）。西安政治を再編成するため、下記の措置がとられた（張魁堂、1994、pp.195-200）。

- (1) 西北抗日連軍臨時軍事委員会の樹立。14日、西北剿匪總司令部の解体を宣言し、同委員会（主任委員：張学良、副主任委員：楊虎城、參謀長：董英斌）が西北の軍政事務を主宰すると発表した。
- (2) 設計委員会の組織。12日、高崇民・杜斌丞・盧広績・応徳田・申徳純・黎天才・洪鈞・王炳南・王菊人をメンバーに発足、西安の政治主張を具体化し張・楊に諮問することを目的とした。のちに南漢宸と苗劍秋が参加。
- (3) 參謀団の組織。東北軍と十七路軍の將領（孫蔚如・王以哲・馬占山・鮑文樾・何柱国・董英斌・李興中）により構成され（主任：何柱国）、軍事方針の具体化に当った。
- (4) 軍隊に対する政治工作の強化。両軍に政治処が設置された（東北軍政治処処長：応徳田、十七路軍政治処処長：申伯純）。さらに東北軍には抗日先鋒隊が（隊長：孫銘九）、十七路軍には抗日同志会（楊虎城を会長とし南漢宸・孫蔚如・趙寿山・王炳南らが参加）が樹立された。
- (5) 陝西省政府の改組。西安綏靖公署參議長であつた王一山が民生庁長兼省長代理となり、秘書長：杜斌丞、財政庁長：統式甫、教育庁長：李寿亭、建設庁長：雷葆華という布陣がしかれた（楊虎城が人選し東北軍関係者の参加はなかった）。
- (6) 宣伝工作の強化。12日、国民党陝西省党部を解体して西北民衆指導委員会を樹立した（主任委員：王炳南・組織部長：蘇資琛・敖明遠・王子安・武装部長：宋黎）。同時に西安における国民党機関紙『西京日報』を接收して『解放日報』に改名し、西北抗日連軍臨時軍事委員会機関紙とした。省放送局も接收され宣伝工作に用いられた。
- (7) 政治防衛工作の実施。12日、軍隊・警察・憲兵・特務を管制対象として、王以哲と孫蔚如を西安戒嚴司令に、趙寿山を省会公安局長に、孫銘九を軍警督察処処長に任命した。

こうして八項目の政治主張を共同綱領とし、東北軍と十七路軍および中共（紅軍）の「三位一体」の意志が西北抗日連軍臨時軍事委員会を核とする諸機構によって実施される態勢が構築された。この段階の「三位一体」における中共の位置について、我々は、(1)決起計画が張学良と楊虎城によって具体化され、中共中央は関与していなかった；(2)12日

から周恩来が西安入りする 17 日までの間、張・楊と中共中央との方針の調整は電信連絡によって行われた；(3)中共は 17 日以降も対外的には調停者というスタンスをとり続けた、ことに留意する必要がある。

民衆指導委員会と 20 日に公開された西救は、西安民衆運動の牽引車であり、10 日余りの間に各種の救亡団体は 200 余りとなった。救国会組織は西安周辺の 20 数県に樹立された。「民先隊」も隊員を 4-500 人に拡大した（張魁堂，1994，p. 200, 211, 288）。

17 日、周恩来は羅瑞卿・許建國ら九人の中共代表団をともない西安に到着した（中共中央文獻研究室編，1989，p.335）。これ以降の西安の方針は、張・楊と周の三人で決定されることとなる。23-25 日の宋子文・宋美齡との交渉と周恩来の蒋介石との会見によって、西安事変の平和解決が確定した（楊奎松，1995，pp.358-371）。翌日、張学良は蒋介石をとともに洛陽に飛んだ。

23 日、博古と葉劍英が西安に到着した。これにともない、周恩来が上層統一戦線工作と大衆団体工作を、博古が党内工作を担当し、葉劍英が西北抗日連軍参謀団に参加するという分業関係ができあがった（中共中央文獻研究室編，1989，p.340）。25 日、博古の指導下で中共陝西省委員会が成立した（書記：賈拓夫，組織部長：歐陽欽，宣伝部長：李一氓，統戦部長：謝華，西安市委書記：張德生）（王健英編，1995，p.409）。

2）西安事変の平和解決と「三位一体」

蒋介石の南京帰還から中共中央の国民党五届三中全会宛電報と同会での「根絶赤禍決議」にいたる過程は、二二事件（東北軍「少壮派」による王以哲殺害事件）による「三位一体」の解体をともないつつ、抗日抗戦態勢の形成という西安事変の平和解決によってさし示された方向が中国政治の枠組みとして定着する過程であった。この時期の西安政治と中共の関係について、我々は、以下の諸点に注目する必要がある。第一に、中共は、「三位一体」を統括しうる唯一の人物たる張学良を欠いた東北軍と、もともと政治的・軍事的基盤が薄弱でなおかつ事変の過程で南京のきり崩し工作に遭遇していた十七路軍を友軍としてつなぎとめることによって「三位一体」を維持しつつ、そのことを背景として南京に中共の存在そのものを承認させる必要があった。第二に、コミンテルン執行委員会は、(1)蒋介石の南京帰還後の情勢を樂觀視し、西北地区と南京とが対峙する局面を作りだそうとしていた中共中央の方針を厳しく批判し、南京に「剿共」政策を放棄させるとともに紅軍との共同抗日を認めさせることこそが党の主たる任務であると指示し（「共產國際執委會書記処致中国共產党中央委員会電」1937 年 1 月 19 日，馬貴凡訳，1988②，pp.78-79），さらに(2)祖国防衛と「中華全国民主共和国」実現のために、ソヴェト政府と紅軍の人民革命政府・人民革命軍への改編，ソヴェトの大衆組織化，普遍的な土地没収政策の放棄を真剣に考慮・検討するよう要請した（「共產國際執委會書記処致中国共產党中央委員会電」1937 年 1 月 20 日，馬貴凡訳，1988②，p.79）。前者は南京の軍事的圧力のもとで和戦問題に揺れていた「三位一体」

内部における中共の主張を方向づけるものであったし、また後者は上述の三中全会宛電報の基本的内容を提示していたのである。第三に、蒋介石からすれば、西北問題の軟着陸（陝西省および甘肅省黄河東岸地区の「中央化」）が当面の最重要課題であった。彼は、軟禁状態にあった張学良の意向を選択的にリークすることにより西安を間接的に制御することに成功した。さらに上述のコミンテルン指示を踏まえた中共の方針転換によって²³⁾、蔣の主張との擦り合わせが現実化していった。

中共代表団は周恩来を中心に「三位一体」を維持するため奔走し、陝西省委員会は地下組織の回復・党員の拡大・党組織の整備に着手した。一方、西救は、民衆武装・デモ行進・スパイ摘発・募金慰労運動・宣伝活動を精力的に展開した（中共東北軍党史組編，1995①，p.149）。これらの諸活動は「三位一体」を維持・強化するための基本的条件を付与するものであったが、南京による軍事圧力と政治攻勢のもとで「三位一体」内部における緊張と和戦とをめぐる意見の対立は極度に高まり、二二事件が引き起こされた。2月8日、中央軍が西安に入城し、翌日顧祝同率いる西安行營のスタッフが着任した。3月初旬以降、東北軍は東部地区への移駐を開始した。まもなく十七路軍総指揮部が廃止され、楊虎城も出国を余儀なくされた（楊奎松，1995，pp.426-427）。これにともない紅軍も陝甘ソ区に帰還し、ここに「三位一体」は解体した。

3) 「三位一体」解体後の西安政治

「三位一体」の解体によって、西安は中央政府のコントロール下に置かれることとなったが、この時期の中共は下記の三組織を有していた²⁴⁾。

(1) 八路軍駐西安辦事処

「西安事変」平和解決後、三原に紅軍連絡站が設置された。1937年2月（開誠，1996，p.125），同站は西安に移転して紅軍連絡處となった。紅軍の八路軍への改編にともない八路軍駐西安辦事處（処長：李濤，のち伍云甫）と改称された。同處は合法的な公開組織であった。

(2) 中共陝西省委員会

1936年12月成立（書記：賈拓夫）。徐彬如・李初梨ら公開活動に従事していたスタッフと、秘密工作担当のスタッフにより構成されていた。37年4-5月、西安近郊の雲陽鎮に移転。

(3) 社会調査部（農村工作委員会）

秘密組織で情報工作を担当（責任者：呉徳峰）。

盧溝橋事件を契機とする日中全面戦争の勃発と第二次国共合作の発足にともない、八路軍・新四軍の辦事處が南京・西安・武漢・重慶など各地に設立された。これらは事実上の中共事務所であり、抗日のための物資やスタッフの輸送という本来の業務のほか、統一戦線工作や中共地下組織の拠点となった（陳広湘，1988；王健英編，1995，pp.453-454, 459-460）。

²³⁾ 1月24日、中共はコミンテルン指示を検討するための会議を開催し、平和の獲得をすべての活動と政策の中心に据えることを決定した（楊奎松，1995，pp.407-409）。

²⁴⁾ 徐彬如，1991，pp.111-114。これらの組織は中共中央に直属し、博古（のち林伯渠）がその指導にあたった（同前）。

このことは、第二次国共合作の発足によって自らの存在を制度的に保障するとともに中国政治を構成する体制内の一勢力として再定置することに成功した中共が（拙稿，1992，pp.73-74），組織面において全国的ネットワークの構築を実現したことを示すものである。もし中共中央所在地たる延安を頭部に喩え各地の辦事処を身体の各部分に喩えるならば，八路軍駐西安辦事処は咽喉部に位置していた。こうした地理的条件は，日中全面戦争期における西安の党組織に極めて重要な意味を付することとなった。全国的な抗日高潮の最中にあった1938年5-8月，2288人も青年が駐西安辦事処を経由して延安入りした事実は（童小鹏主編，1984，第317図），このことを端的に物語っている。同年末，陝西省委が把握する黨員数は約8000人，さらに中共軍以外の部隊内の黨員を加えると1万人弱に達していた（周維仁，1993，p.47）。

しかしながら，1938年7月の宣侠父暗殺事件²⁵⁾および翌年12月の土橋事件²⁶⁾を契機とする国共関係の緊張により，西安における中共の活動は極めて限定的なものにならざるを得なくなっていった（徐彬如，1991，pp.117-122）。

おわりに

西安における中共組織が再生する端緒となったのは，張学良と楊虎城がコミンテルン第七回大会の新方針を知り，中共との接触さらには提携を志向したことであつた。換言すれば，平津地区における「政治的空白」，上海における租界が果たした役割を，西安では「地方実力派」による庇護がそれらを代替したということになる。

1936年4月における「三位一体」の初步的形成は，中共と東北軍に「反蒋抗日」政権の樹立を具体化させた（「西北大連合」構想）。5-6月，両広事変と救国会運動の発展は中国政治そのものを「抗日」の方向に傾斜させるとともに，中共に全国的ネットワークを構築させる初期的条件を付与した。しかしながら，コミンテルンの八月指示により「西北大連合」構想は頓挫した。

9月，「三位一体」の成立により，西安における大衆的抗日運動は活発化した。その中心に位置していたのは西救と東救に代表される救国会系組織であつたが，この両組織において中共地下組織が中心的位置を占めていた点は，平津地区や上海と同様であつた。西安事変の勃発により，「三位一体」は西北抗日連軍臨時軍事委員会という統括組織を成立さ

25) 宣侠父は1899年生れで，24年中共に入党。37年9月に第十八集团軍（八路軍）高級参議となり，西安における中共の統一戦線工作の第一線に立っていた（金戈・鮑小牛・劉彤壁・奥存才，1984，pp.1-3, 43, 49, 52-56）。

26) 1939年12月，国民党軍は淳化县土橋鎮で事件を起し，さらに国共二重政権下にあつた寧県・鎮原両県城を占領した（徐彬如，1991，p.121）。この事件は，日本軍占領下の華北地区における国民党系勢力に対する中共勢力の優位を背景とする国共関係の緊張に由来していた（楊奎松，1992，pp.78-92）。

せた。これ以降の西安における大衆的抗日運動は、西北民衆指導委員会が中心となり、西救などの救国会系統一戦線組織がそれを展開し、中共地方組織（12月25日、陝西省委員会成立）が内面から運動を支えるという形態をとることとなる。民衆指導委員会という地域権力化した統括組織によって樹立された指導機関は平津地区や上海における大衆的抗日運動には存在せず、このことが西安抗日運動を特色づけるものであった。そして35年夏の黨員数3・400人から38年12月における8,000人への飛躍的拡大は、まさにこの時期にもたらされたものであったと考えられる。

同時に、西安事変に際して張・楊が提起した八項目の政治主張のなかに「七君子」の即時釈放が含まれていたことは、「三位一体」を支える社会的基盤の付与という西安の大衆的抗日運動が西北軍事委員会に対して果たした役割と、上海救国会運動が都市部における広範な社会的基盤を形成しつつあったこと—それゆえに「七君子」は逮捕されたのである—との同質性を示している。一方、中共が西北軍事委員会の一翼を担いつつ南京に対しては張・楊との「調停者」であるという立場を取りつづけたことは、南京に中共問題の軍事的解決を断念させるための政治的・軍事的前提と、政治主張におけるある種の幅を中共に付与することになった。そして1936年8月と翌年1月のコミンテルン指示は、中共のこうした政策展開を基本的に規定するものであった²⁷⁾。

30年代なかばの中国政治を担っていた諸政治勢力—南京国民政府(蒋介石)、「地方実力派」、中共、そして大衆的抗日運動を推進していた左派知識人—は、それぞれ位相を異にしつつ基本的主張のなかに「抗日抗戦」の論理を組み込んでいた²⁸⁾。36年12月から翌年2月（国民党三中全会における中共問題の軍事的解決方針の放棄）にいたる政治過程は、この四勢力の政治主張が「内戦停止・一致抗日」の論理のもとに収斂され定着していく過程であった。抗日民族統一戦線政策への中共の方針転換に触発された救国会運動の発展は、西安事変の勃発によって新たな質—「地方実力派」と中共の提携を根底部分において支え、維持・発展させるものとしての大衆的抗日運動—を獲得した。従って、「三位一体」は30年代前半期とは異なる中国政治の質を象徴するものであり、そして「三位一体」を背景とする中共と「中央化」の進展を体現する国民政府との交渉が、中国政治を第二次国共合作の成立に方向づけたとしなければならない。

1937年2月以降の西安の政治動向は第二次国共合作期における白区の状況を先取りするものであり、中共は、「地方実力派」を介することなく南京国民政府と直接的な関係を有

27) しかしながらこのことは、中共中央がコミンテルンの指示を盲目的に遂行して何も付け加えることがなかったということを意味しない。36年12月21日のコミンテルン指示の西安への選択的伝達(楊奎松, 1995, pp.333-334), あるいは、翌年5月のソ区代表者大会における毛沢東による新政策の体系化(拙稿, 1987, pp.96-97)などがその例である。とはいえ、この段階における両者の関係は協調的なものとして把握する必要がある。

28) 蒋介石の「抗日抗戦」論については、今井駿(1997①②)を参照。

することとなる。その意味では抗戦初期の武漢と同様の枠組みを有していたといえよう²⁹⁾。38年9-11月に開催された中共六届六中全会において、中共は党・軍・政の三系統を有する自らの組織を一元的機構として確立した（拙稿，1999）。八路軍辦事処の全国的ネットワークは、一元的組織機構の実現とともに中共が新たな政治展望を練り上げる前提となるべきものであった。

【参考文献】

- 石島紀之（1984），『中国抗日战争史』青木書店 230p.
- 今井駿（1997①），「国民党系の抗戦論と抗戦戦略」（今井駿『中国革命と対日抗戦—抗日民族統一戦線史研究序説』汲古書院）pp.130-182.
- 今井駿（1997②），「蒋介石の対日戦略」（今井駿，同上書）pp.210-240.
- 今井駿（1997③），「張学良と西安事変」（今井駿，同上書）pp.243-276.
- 矢沢康祐（1963），「1930年代中国における帝国主義と反帝国主義」『歴史学研究』第279号 pp.1-9,51.
- 田中仁（1987），「中国共産党における抗日民族一戦線理論の確立」（池田誠編著『抗日戦争と中国民衆』法律文化社）pp.80-99.
- 田中仁（1992），「路線転換期における中国共産党の根拠地構想」（横山英・曾田三郎編『中国の近代化と政治的統合』溪水社）pp.57-82.
- 田中仁（1994②），「中国革命の歴史的再検討」（上原一慶編『現代中国の変革』世界思想社）pp.1-64.
- 田中仁（1994③），「武漢における抗日高潮と中国共産党」（今永清二編『アジアの地域と社会』勁草書房）pp.27-59.
- 田中仁（1998），「書評：今井駿『中国革命と対日抗戦』」『現代中国研究』第3号 pp.97-100.
- 田中仁（1999），「中国共産党の組織再編をめぐる一考察（1934-1938）—政党・軍隊と“国家”」『アジア研究』第44巻第4号 pp.1-36.
- * * *
- 陳広湘（1988），「抗戦時期八路軍駐各地的の辦事処」『党史信息報』第62期，1988年7月16日.
- 江山・胡民新・黄朝章（1983），「宋綺雲」（中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第9巻，陝西人民出版社）pp.258-281.
- 金戈・鮑小牛・劉彤璧・奥存才（1984），「宣侠父」（中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第15巻，陝西人民出版社）pp.1-57.
- 開誠（1996），『李克農—中共隱蔽戦線の卓越領導人』中国友誼出版公司 460p.
- 李敬謙（1984），「楊明軒」（中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第18巻，陝西人民出版社）pp.69-86.
- 李敬謙（1994），「杜斌丞」（中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第54巻，陝西人民出版社）pp.287-324.
- 李勇・張仲田編（1988），『統一戦線大事記—抗日統一戦線巻』中国经济出版社 414p.
- 凌輝（1987），「張文彬」（中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第33巻，陝西人民出版社）pp.187-203.
- 馬貴凡訳（1988①），「蘇聯新發表の共産國際有關中国革命的檔案文件（之二）」，宋洪訓校，『中共党史研究』1988年第2期 pp.79-87.
- 馬貴凡訳（1988②），「蘇聯新發表の共産國際有關中国革命的檔案文件（之三）」，宋洪訓校，『中共党史研究』1988年第3期 pp.78-88.
- 米暫沉（1986），『楊虎城將軍伝』，米鶴都整理，中国文史出版社 275p.
- 申伯純（1987），「南漢宸派我與楊虎城聯係」（十七路軍中共党史資料徵編領導小組主編『丹心素裹』中国文史出版社）p.287.
- 宋黎（1995），「我所了解的東北軍地下党」（中共東北軍党史組編『中共東北軍地下党工作回憶』中共党史出版社）pp.13-83.
- 童小鵬主編（1984），『第二次国共合作』文物出版社.

²⁹⁾ 抗戦初期における武漢の政治状況については、拙稿（1994③）を参照。

- 王炳南 (1986), 「代序言」(米哲沉『楊虎城將軍傳』中國文史出版社) pp.1-2.
- 王健英編 (1995), 『中國共產黨組織史資料匯編—領導機構沿革和成員名錄』增訂本, 中共中央黨校出版社 1352p.
- 王菊人 (1986), 「記西安事變前後的幾件事」(中國人民政治協商會議陝西省文史資料研究委員會編『回憶楊虎城將軍』陝西人民出版社) pp.189-229.
- 武育文・王維遠・楊玉芝 (1987), 『張學良將軍傳略』遼寧大學出版社 604p.
- 西安事變研究會資料室編 (1986), 『西安事變電文選』陝西師範大學出版社 184p.
- 徐彬如 (1991), 『六十年歷史風雲紀實』中國文聯出版公司 267p.
- 楊奎松 (1992), 『失去的機會?—抗戰前後國共談判實錄』廣西師範大學出版社 345p.
- 楊奎松 (1995), 『西安事變新探—張學良與中共關係之研究』東大圖書公司 469p.
- 葉英・馮凱 (1985), 「南漢宸」(中共黨史人物研究會編『中共黨史人物傳』第26卷, 陝西人民出版社) pp.269-296.
- 葉英・段建國 (1985), 「王世英」(中共黨史人物研究會編『中共黨史人物傳』第26卷, 陝西人民出版社) pp.297-325.
- 張魁堂 (1990), 「劉鼎在張學良那里工作的時候」(中共中央文獻研究室・中央檔案館・黨的文獻編輯部編『中共黨史風雲錄』人民出版社) pp.219-249.
- 張魁堂 (1994), 『挽危救亡的史詩—西安事變』廣西師範大學出版社 485p.
- 趙世臣 (1990), 「西北地區統一戰線建立述略」(張鈇男・宋春・朱建華主編『中國統一戰線大事記事本末』吉林大學出版社) pp.149-155.
- 鄭惠・張靜如・梁志祥主編 (1997), 『中國共產黨通志』中央文獻出版社 3248p.
- 中共東北軍黨史組編 (1995①), 『東北軍與民衆抗日救亡運動』中共黨史出版社 226p.
- 中共東北軍黨史組編 (1995②), 『中共東北軍黨史概述』中共黨史出版社 261p.
- 中共東北軍黨史組編 (1995③), 『中共東北軍黨史已故人物傳』中共黨史出版社 295p.
- 中共中央統戰部・金陵之聲廣播電台編輯部編 (1986), 『統一戰線工作手冊』南京大學出版社 866p.
- 中共中央黨史研究室 (1990), 「西安事變前我黨就聯合抗日問題與張、楊部聯絡談判的一組文電」, 『中共黨史資料』第33輯 pp.1-17.
- 中共中央文獻研究室編 (1988), 『文獻和研究: 1986年匯編本』人民出版社 528p.
- 中共中央文獻研究室編 (1989), 『周恩來年譜』中央文獻出版社・人民出版社 845p.
- 中共中央文獻研究室編 (1993), 『毛澤東年譜』上卷, 人民出版社・中央文獻出版社 686p.
- 中央檔案館編 (1991①), 『中共中央文件選集』第10冊, 中共中央黨校出版社 806p.
- 中央檔案館編 (1991②), 『中共中央文件選集』第11冊, 中共中央黨校出版社 890p.
- 周國全・郭德宏 (1991), 『王明年譜』安徽人民出版社 208p.
- 周維仁 (1993), 『賈拓夫傳』中共黨史出版社 334p.
- 田中仁 (1993), 「從“一二九”到“八一三”時期的上海地下黨」, 張曉峰譯, 『中共黨史資料』第45輯 pp.206-223.
- 田中仁 (1994①), 「華北事變與中國共產黨在平津地區的組織和活動」, 鉄鷹譯, 『北京黨史研究』第85期 pp.54-59.

(たなかひとし・大阪外国語大学)